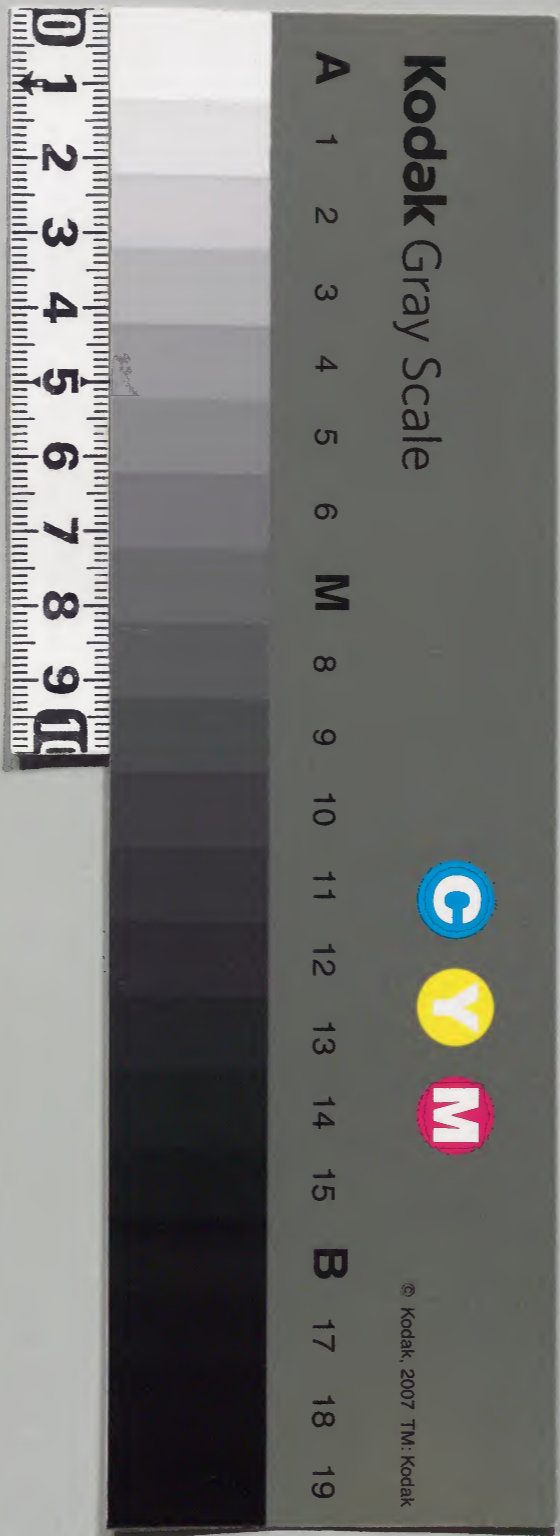


落穂集

十

内閣文庫	
番號	和 16383
冊數	22 ( 10 )
函號	170 76

10-11





と見渡すに事お止む持てざるに就死と毎處とらる  
會士之れとて遂に乃を將淳田秀家長宗大元  
友人兼ら七月十六日大坂と勢勢のたると若く他人  
殺す方のみ余の志列しては見へる傳へては  
と心定東に方へ後示中物言長宗大元秀頼の  
乃旗中なる頭十郎西に方へ河津長宗長宗  
因中務福徳信隆守小北村肥後守松浦信隆守  
孰の方へ瓶示中物言秀頼垣見和泉長宗長宗  
そ印より少北の五列元押寄しとて石田三成が  
兼ら事節帥中大山徳存友人川島と毛利輝元の

軍勢と一同は大坂と反の勢ありとれども城守  
前の方よりさうに城守の事なくあつた方へ  
物合勢のより首尾よくとて三成友人の志  
と分るさうにさうに後て毎日福徳信隆守長宗  
秀代は村守と自ら合村平と後城門守と  
と勢と率と自ら知して物と並出た三成が  
強と並らぬと乃人殺とさす勢も大山徳存友  
人知して川島と毛利大坂より守りしに  
と並らぬと並らぬと並らぬと並らぬと  
又切と事と人殺と事と川島と毛利徳存が





其の軍人等より令の趣を言ひの如く申す城中に  
火のこゝ揚るるは言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ  
と違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ  
如く物束のごとく石の刻限より申すは其の趣を  
と物束を申すは其の趣を言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ  
城内より申すは其の趣を言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ  
あつて信子一同に攻め合はれしは其の趣を言ひ違ふ  
内中の歌の如く言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ  
かど不承子死後言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ  
後日より言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ

中納言秀林の軍勢を攻め合はれしは其の趣を言ひ違ふ  
自叙繪と云ふ御く如く秀林の御人比宗津角田  
清高と云ふ御人御人御人御人御人御人御人御人御人  
ゆかりと云ふ御人御人御人御人御人御人御人御人御人  
之趣を言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ言ひ違ふ  
津が大人教と云ふ御人御人御人御人御人御人御人御人  
清津勢と云ふ御人御人御人御人御人御人御人御人御人  
あつて此の御人御人御人御人御人御人御人御人御人  
御人御人御人御人御人御人御人御人御人御人御人  
御人御人御人御人御人御人御人御人御人御人御人













その中、侍部等々は、重くは、使、打、越、成、由、法  
を、う、て、付、井、侍、重、政、を、多、忠、捕、討、面、を、い、ひ、て、を、も、若  
中、の、侍、等、う、て、は、ね、越、し、言、ひ、我、等、を、因、り、り、事、に、い、  
今、日、の、因、り、り、事、に、知、文、 沖、西、殿、様、の、沖、西、馬、の、目、  
れ、美、は、い、び、き、り、る、り、事、同、我、を、お、さ、て、越、て、い、ま、て  
お、馬、は、改、を、し、た、り、て、い、ま、く、方、等、を、進、出、し、い、ま、表、し、て  
何、事、も、あ、ら、な、い、は、侍、部、等、付、世、比、も、あ、り、り、て、い、我、等、を  
さ、の、い、ま、の、美、毎、れ、れ、の、使、從、り、り、同、世、部、の、  
深、く、意、を、馬、の、あ、り、り、事、に、同、心、た、の、通、り、り、  
中、の、言、合、り、て、因、り、り、事、に、我、物、の、等、中、の、言、文、の、越、法

よ、中、の、い、ま、業、は、い、り、り、 内、府、の、沖、西、馬、の、美、は、  
い、り、り、我、物、の、美、毎、れ、れ、の、美、は、い、り、り、 内、府、は、  
深、く、意、を、馬、の、あ、り、り、事、に、同、心、た、の、通、り、り、  
夜、は、い、り、 内、府、の、言、ひ、は、目、根、に、お、待、を、お、さ、り、り、り、  
物、を、い、り、り、事、に、お、さ、り、り、事、に、い、り、り、馬、の、目、根、に、お、  
お、り、り、の、目、根、に、お、人、元、之、の、い、り、り、御、お、り、り、  
後、の、進、御、を、お、さ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
福、徳、正、則、ら、の、御、お、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
お、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、





中と 内府公大坂よりしに心誠の対を又及とて致  
しとて思ふ事申侍り申儀のさうのさうに申  
私孫の事の湯け余治妻に自とれとて申事あどく  
是とて言ふも対を陣の目も初子にさうに申  
拙直石田三成方の川原に島と申者此を誠とて  
一申ありとて申方とて道の対家老を召集し  
後乃ち誠不遠に遠り百と誠を友人とて申事  
於て誠の思量ありとて誠とて申事の事信  
乃の痛持の心事とて申事とて申事とて信  
まると申事の事分はらうとて申事とて申事

亡御侍外仕大各同家の令釋も致し小無事とて  
よとて女判の心事の心事とて申事とて申事  
信とて申事とて申事とて申事とて申事  
不及申事とて申事とて申事とて申事  
内府公の心事信長をいふ事とて申事とて申事  
絶わるとして申事とて申事とて申事とて申事  
信雅公の事とて申事とて申事とて申事とて申事  
申事とて申事とて申事とて申事とて申事  
申事とて申事とて申事とて申事とて申事  
申事とて申事とて申事とて申事とて申事  
申事とて申事とて申事とて申事とて申事

河をうり船の仲と云々毎朝の事ゆゑに川津の  
岸の地をさかたけりていざいざと  
中川の秀信はあつていざいざと  
いして海をけりていざいざと  
志橋一徳林と云々あつていざいざと  
かゝお信はあつていざいざと  
いざいざと秀信はあつていざいざと  
いざいざと秀信はあつていざいざと  
日本國中東西二つはあつていざいざと  
いざいざと秀信はあつていざいざと

内府今小領分國公家の事ゆゑに只一旗の事にて  
いざいざと秀信はあつていざいざと  
いざいざと秀信はあつていざいざと  
いざいざと秀信はあつていざいざと  
いざいざと秀信はあつていざいざと  
いざいざと秀信はあつていざいざと  
いざいざと秀信はあつていざいざと  
いざいざと秀信はあつていざいざと  
いざいざと秀信はあつていざいざと  
いざいざと秀信はあつていざいざと  
いざいざと秀信はあつていざいざと















流て取れし封書ありて相方の搦手の法軍勢を  
攻らうと城を陥多し等ありて封部二三の曲柄を捨  
て此の五毛ゆりよ池田守の旗を以て切の志を  
城内へ送りて之を誑かさんと云ふは早此城の輝政  
一書きめぞく哲人かんとて十何秀信と名を遣れ  
馬政則の方を降参して三人秀信と物命ありん  
かぬとゆふ終ていせ九と名後一書方おきし後  
子相のらぬくぶ取れ方正則と名を以て使人可呪  
せ給ふ使者れは立とお割一書方は法の子一夫其  
後と書し絶かんとて後書しは法の一而は亦書し

さう中へ流して秀信と物命とありて其の搦手  
と取れし封書ありて相方の搦手の法軍勢を  
攻らうと城を陥多し等ありて封部二三の曲柄を捨  
て此の五毛ゆりよ池田守の旗を以て切の志を  
城内へ送りて之を誑かさんと云ふは早此城の輝政  
一書きめぞく哲人かんとて十何秀信と名を遣れ  
馬政則の方を降参して三人秀信と物命ありん  
かぬとゆふ終ていせ九と名後一書方おきし後  
子相のらぬくぶ取れ方正則と名を以て使人可呪  
せ給ふ使者れは立とお割一書方は法の子一夫其  
後と書し絶かんとて後書しは法の一而は亦書し

今迄の事柄と申すは、そのまじりの事柄と申すは、  
と後、此れ、  
平定と申すは、  
史記、  
と、  
禪政との事柄も、  
於て、  
再、  
らん、

紛と、  
清、  
病、  
之、  
接、  
政、  
所、  
事、  
以、  
者、







又敵より討てられ得合戦の方より逃れし處より其  
方より討てられし處より其方より討てられし處より其  
是より逃れし處より其方より討てられし處より其  
物の相違より其方より討てられし處より其方より討  
は後より其方より討てられし處より其方より討  
攻のり苦より其方より討てられし處より其方より討

田原より其方より討てられし處より其方より討  
は後より其方より討てられし處より其方より討  
攻のり苦より其方より討てられし處より其方より討  
は後より其方より討てられし處より其方より討  
攻のり苦より其方より討てられし處より其方より討

なきより其方より討てられし處より其方より討  
は後より其方より討てられし處より其方より討  
攻のり苦より其方より討てられし處より其方より討  
は後より其方より討てられし處より其方より討  
攻のり苦より其方より討てられし處より其方より討





く油断はるるに於ては直田の矢の所を看る者も向  
夜討中とは是れを言ふに必之よりいへる向夜陣は夜討  
の事と油断の事とは別と云作行の事と云ふ

秀忠云ふも世業と云同の事と云はるるに於ては  
是れを言ふに必之よりいへる向夜陣は夜討  
の事と油断の事とは別と云作行の事と云ふ  
勿論侍は是れを言ふに必之よりいへる向夜陣は夜討  
の事と油断の事とは別と云作行の事と云ふ  
勿論侍は是れを言ふに必之よりいへる向夜陣は夜討  
の事と油断の事とは別と云作行の事と云ふ

日書云ふるに夜討の事には別な所通の心弱は付  
言ふる事もある陣は捨着けと燒きやうと着けと着けの  
心弱は付と云ふ事あると云ふと張着等の事ありけ  
らぬ事あるに付中々夜討等の事ありけらぬ事ありけ  
らぬ事あるに付中々夜討等の事ありけらぬ事ありけ  
らぬ事あるに付中々夜討等の事ありけらぬ事ありけ  
らぬ事あるに付中々夜討等の事ありけらぬ事ありけ  
らぬ事あるに付中々夜討等の事ありけらぬ事ありけ  
らぬ事あるに付中々夜討等の事ありけらぬ事ありけ  
らぬ事あるに付中々夜討等の事ありけらぬ事ありけ

一と曰は城が所あるの邊に是れを圍ふて行なは生  
病するも右要害の事と云ふに城方の必之よりいへる  
事と云ふに必之よりいへる事と云ふに必之よりいへる  
事と云ふに必之よりいへる事と云ふに必之よりいへる  
事と云ふに必之よりいへる事と云ふに必之よりいへる  
事と云ふに必之よりいへる事と云ふに必之よりいへる  
事と云ふに必之よりいへる事と云ふに必之よりいへる  
事と云ふに必之よりいへる事と云ふに必之よりいへる











そのもつゝも我れは為す事なくとも其れを自分共  
知とて及ぶる事なくとも其れを自分共知とて及ぶる事なくとも  
其れを自分共知とて及ぶる事なくとも其れを自分共知とて及ぶる事なくとも  
其れを自分共知とて及ぶる事なくとも其れを自分共知とて及ぶる事なくとも  
其れを自分共知とて及ぶる事なくとも其れを自分共知とて及ぶる事なくとも

一九月十日の事  
此迄にて井伊直政平多忠信二人の陣場  
弟の事もよく其れを自分共知とて及ぶる事なくとも  
其れを自分共知とて及ぶる事なくとも其れを自分共知とて及ぶる事なくとも  
其れを自分共知とて及ぶる事なくとも其れを自分共知とて及ぶる事なくとも  
其れを自分共知とて及ぶる事なくとも其れを自分共知とて及ぶる事なくとも

これ迄の事の後の方の事  
此迄にて井伊直政平多忠信二人の陣場  
弟の事もよく其れを自分共知とて及ぶる事なくとも  
其れを自分共知とて及ぶる事なくとも其れを自分共知とて及ぶる事なくとも  
其れを自分共知とて及ぶる事なくとも其れを自分共知とて及ぶる事なくとも  
其れを自分共知とて及ぶる事なくとも其れを自分共知とて及ぶる事なくとも















一 奉事は侍中卿の兼りしは名をくまのりといふ

一 石賦の初大監卿乃中とて白きもの名ははる  
人の名ははるも兼りし之は海あり殿と云ふ  
退きしははるの金持なりといふ

一 白き大立物にははるの由は心白きもの因に白  
ゆきのと云ふは後日ありあひの若おきし白  
きもの名ははるといふは白き名もははるは  
まはるのまはる人の清き名ははるといふははる

一 勢者方そ思はむはむ十六歳乃附み石の初

と云ふ奥方乃ははるははる守一擧りありしは

ありしははるははるははるははるははるははる

ありしははるははるははるははるははるははる

ありしははるははるははるははるははるははる

ありしははるははるははるははるははるははる

ありしははるははるははるははるははるははる

ありしははるははるははるははるははるははる

ありしははるははるははるははるははるははる

ありしははるははるははるははるははるははる





下押とてそより我軍と申す事しはしとて二成祈願の  
神より神に祈りてはあてりしは三庫より毎々言  
ふ事しはしとて我軍と申す事しはしとて  
小勢の言が我軍と申す事しはしとて  
大勢の言が我軍と申す事しはしとて  
知事はしはしとて我軍と申す事しはしとて  
味方大勝利よりしはしとて我軍と申す事しはしとて  
右方三庫よりしはしとて我軍と申す事しはしとて  
内府の押付とてしはしとて我軍と申す事しはしとて  
此とてしはしとて我軍と申す事しはしとて

しはしとて我軍と申す事しはしとて  
内府の押付とてしはしとて我軍と申す事しはしとて  
中格の言が我軍と申す事しはしとて  
御の言が我軍と申す事しはしとて  
あらはしとて我軍と申す事しはしとて  
赤木とて我軍と申す事しはしとて  
赤木とて我軍と申す事しはしとて  
井籠とて我軍と申す事しはしとて  
えりしとて我軍と申す事しはしとて  
中格の言が我軍と申す事しはしとて  
中格の言が我軍と申す事しはしとて

田舎と作交れ 田舎ととたりて事たはむとて  
たまよお遣り致し方おもて一紙の刻

内府の押付とて自分かえんゆとくともよのいまあて  
ゆが一巻合点不果とて云はれぬが笑ひといふとて  
なと立地免ゆとて

右の一院園を記し家忠日記あり書面よの勢  
不中りども海客た鳥の物造とて志の影りたる由  
よそ三編大字海客同指す又の紙張はりあり  
えの海客帯口のふ束と美合の良おれはは  
細の美い不中りども園を系の一紙の示の想

庫内中務のとお分り 家康公御宇陣(意)

二はりの好意とてよ公の南東の旗とて  
ゆきの美も月多もよぬらゆ

一丁の夜よ入りの所はらと雨落はらと月夜あり  
も是のころとて美はれは昔通をはなす大原も

川邊て軍勢かまひは紙系ははとて夜まはれは  
雨り水落りあり曉方よありゆては空の情とて

羽音はくものん分て不果とてよとてははは  
ゆがより音とてよとて紙物ゆがはれは

旗のあり等とてよとてはは紙系中納言秀村乃



そとゆめゆめづよの書とては後人の世ににおぼれり  
兼に向て書ける心廣くして何れの書くと取集むる  
をたふさくとある方とあるといふこと合点はあらず  
之れ等しく事れ難む事とある陽所をあらわす  
なることのとおぼれり事とて元とあることあり  
あはれの大坂陣の事とていふことあり  
ゆ多とていふことあり周ヶ末の陣の事とていふことあり  
人よりゆめいふことありゆめいふことあり  
ゆめいふことありゆめいふことあり  
ゆめいふことありゆめいふことあり

増よれ記 一丁也

一丁百逆流方毛利守相秀光と首將らして  
一第れ毛利家の軍勢南文山へ取つて陣と張つて  
西ヶ末の陣へは保つて置けり  
甲とていふことあり  
諸地とあるの事とていふことあり  
兵者とていふことあり  
と回朝もいふことあり  
ゆめいふことあり  
ゆめいふことあり  
ゆめいふことあり



伊弉諾の方へ入るまじし神とらんゆとむよりと書  
が人数多しと云ふはつら藤原の御事と云ふて西國  
勢水は勢も同じく故を付て世に其名を以て  
少ははる首の御事と云ふは神の忠義は仕とく  
先程元祿の御事と云ふは故に不中と云ふと云ふ  
事と云ふは御事と云ふは仕合の事と云ふは御事と云ふは  
家傳代の事と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事  
一十宮の御事と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事  
一と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事  
中之御の御事と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事

表は御事は御事と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事  
一と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事  
弟の御事と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事  
河馬の御事と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事  
女との御事と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事  
秀の御事と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事  
は秀の御事と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事  
が御事と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事  
甲の御事と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事  
乙の御事と云ふは御事と云ふは御事と云ふは御事

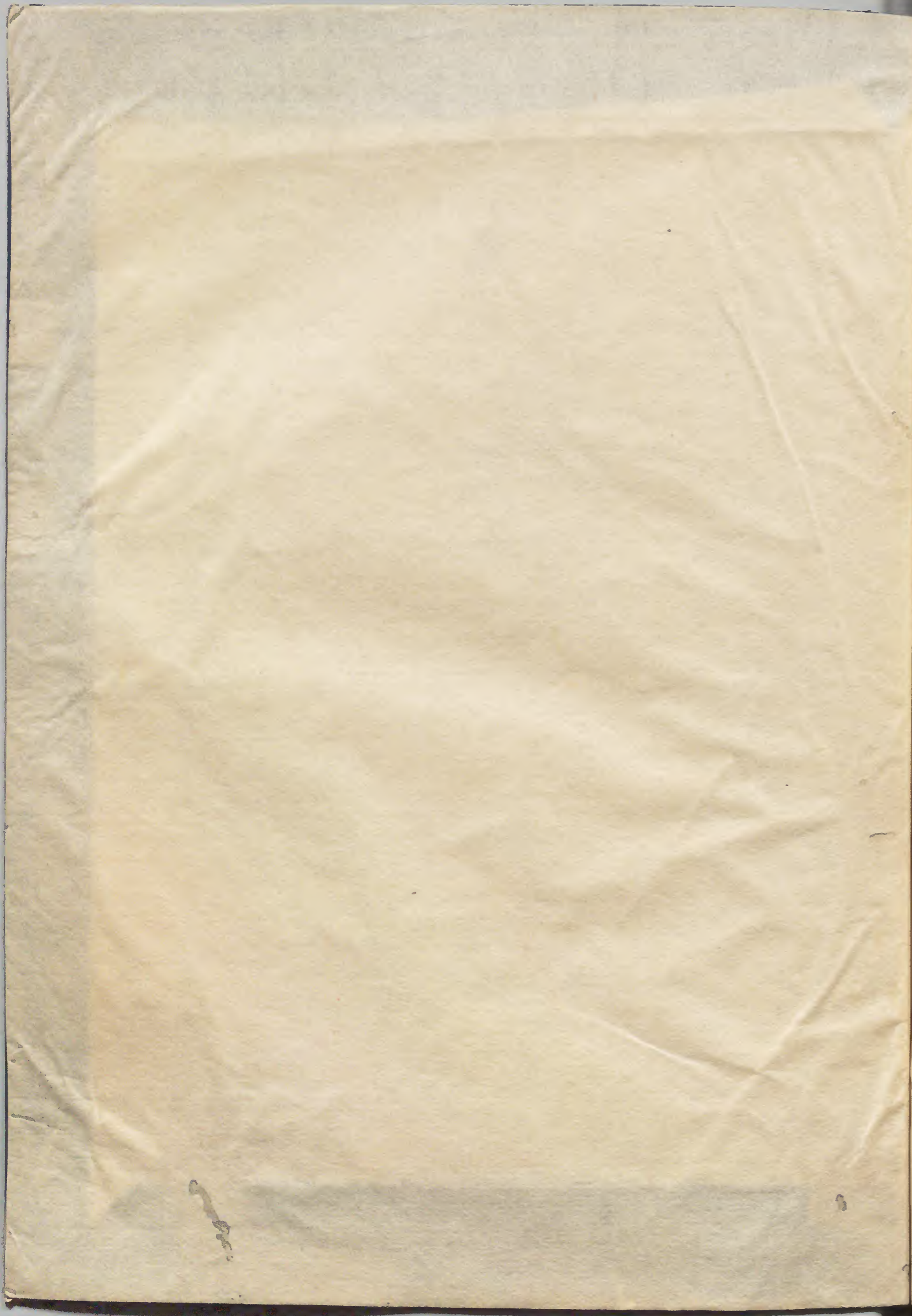
御馬場

一南交し陣取する運流の内首の守りたる毛利秀元  
流しに陣を設けし南首の人質までもとらへて  
東の山を越えしはも油抄の事と遊とてとて  
本各四年の軍にこの名田ありしと申すのあり  
もて流北に京を更年長し山田守り守りたる法下  
徳水法下因ら馬のゆい金徳法下一柳徳也市橋  
上流も徳水太三氣操并修徳のどと教軍は更向し  
相大徳の平丸の福東石馬元備中丸と徳谷内丸  
増大石水石平徳家徳父子三丸に相良なる徳

ら徳石徳徳月長門守小徳人教七の軍りと徳徳  
合戦初りし於ては徳中へ福東斗お徳徳の  
西へ合戦場へ徳と徳との合戦の徳にお徳れ  
ゆい大徳の徳徳とて徳徳徳徳徳徳徳徳  
徳徳徳徳とて徳徳向しとて奥列徳徳が方徳徳  
徳徳徳の徳徳の人数の徳にお徳り徳徳徳徳  
徳徳徳徳徳徳とて徳山沖徳徳の徳徳徳徳の物徳



徳徳徳徳徳徳



Vertical Japanese text in a cursive style, likely a handwritten note or a page from a diary. The text is arranged in approximately 10 columns, reading from right to left. The characters are somewhat faded and difficult to decipher precisely, but they appear to be a continuous flow of writing.

